

一粒の麦

ニュースレター

Vol. 15



日本カトリック神学院福岡キャンパス正面

2010. 7. 22

巻頭言

祈りは必ず神に聞き届けられる

カトリックさいたま教区
司教 谷 大二

13 年前のことです。私は青年たちとハノイを訪れました。その時の観光ガイドの青年がなんと予備神学生だったのです。そのことを知った私たちは急ぎよ、コースを変更し、彼の所属する教区を訪ねることにしました。

彼の所属する教区の司教館はハノイから車で1時間ほど。司教館で一人の司祭、二人の司教と出会いました。それが教区のすべての司祭だったのです。世界で唯一、司祭の数より司教の数が多い教区でした。信徒数は 15 万人、小教区は 150 です。

彼の出身教会も訪問しました。たくさんの子もたちが集まっていました。そこでは毎週、集会祭儀が行われ、洗礼、葬儀、結婚などすべて信徒が司式しています。司祭の訪問は年に 1、2 回。それも、1 週間前に噂が広まって、ミサがあることを知るのです。ミサの前晩はゆるしの秘跡が夜遅くまで続きます。なにしろ150の小教区で司祭が一人なのですから。

予備神学生と神学生は合わせて 300 人くらい。彼の予備神学校はハノイにあり、そまつな民家を借りたものです。15 名ほどの共同体です。月に一度、司祭が訪問するそうです。アルバイトで生活費を稼ぎ、共同体の運営をみんなで分担していました。そのなかで何人が司祭になれるのか。そんな不安を抱えながら祈りの生活に励んでいました。今でも政府の許可がなければ司祭叙階はもちろん、神学校にも入れないのでから。

この旅で、私は青年たちと一つの約束をしました。彼が司祭になるまで祈りつづけよう。

そして、私は 2009 年 10 月にベトナム、ハノイの近くのバックニン教区の司祭叙階式に参加しました。もちろん、クワン神学生の叙階式です。私たちの祈りが、そしてバックニン教区の皆さんの祈りが神に聞き届けられた、その喜びを共にするためです。ちなみに、彼は 28 番目の教区司祭になりました。

祈りは必ず聞き届けられる。もちろん、さいたま教区の私たちの祈りも神に聞き届けられています。どうかこれからも、神学生のために、そして司祭、シスターを志す人たちのために、祈りは必ず神に聞き届けられるという信念をもって祈りつづけましょう。

新司祭紹介

これまでありがとう、これからもよろしく

ネルソン・カバシシ・セノ神父

みなさんお久しぶりです。今年は格別に暑さが厳しいようですが、みなさんはお元気で過ごして
ようか。

今年の3月22日、私は皆様のお陰で、浦和教会で司祭叙階の恵みを頂きました。これまでずっと
心にとめて祈って頂き、また様々な形で支えて下さったことに本当に感謝しています。

司祭叙階を受けて自分の中で不思議な感じがしましたが、何かが急に変わった、ということはない
ですが、やはりミサはみなさんとともにささげる時、これまでとは違う気がします。司祭としてミサに与る
というのは、責任を感じますし、これまで以上に集中力を使っている気がします。ミサをささげるときは
間違いないように一所懸命にやっている感じですが、イエスがいなければどうにもならないと思います。
自分はただの道具に過ぎないのだなあと感じる瞬間です。

叙階式の中で谷大二司教様からの発表で、私は群馬県の西ブロック(高崎教会・新町教会・藤岡
教会・富岡教会)に派遣されて、5年間の予定で猪俣神父様と根津助祭様と共に担当することになり
ました。

これからいろいろな経験をしていくのだと思いますが、イエス様と共同体に信頼して一歩ずつ歩んで
いきたいと思っています。司祭となって、ようやくスタートしたところです。これまでのようにこれからも、
みなさんのお祈りをお願いします。

私たちの主イエス・キリストの + 祝福がみなさんの上に豊かにありますように。アーメン。

神学生より皆様へ感謝をこめて

つながり

神学科3年 ルカ 姜 玫周

さいたま教区の神学生たちのためにいつもお祈りとご援助をくださる皆様、お元気ですか。

今年3月、前橋で聖香油ミサが行われた日、同級生の佐藤さんと祭壇奉仕者としての選任を頂きました。まだ何も出来ていないのに時間に伴って着々と進んでいくことに何か申し訳ない気持ちが生じます。

今年さいたま教区の神学生は6人で、全員日本カトリック神学院、福岡キャンパスで養成を受けています。こちらに来てもう2年目になっていますが、やはり教会の雰囲気の違いを感じます。夏休みとか春休みの時、さいたまに戻り、また学期が始まって九州に行くと、その何とも言えない違いを感じます。どちらが良くて、どちらが悪いという意味ではありません。距離的に千キロ以上離れているところですから、違うことは当たり前かもしれません。しかし、福岡にいても、主日のミサは同じだということを考えると、何かのつながりを感じます。「時間の差は少しあるとしても、場所が違うとしても、同じ日に、同じ神のことばを聞き、同じ主の食卓に招かれているんだよ」と、ある神父様から話を聞いてから、以前お世話になった教会や神父様、信者の方々を思い出します。日曜日、「今の時間、あの教会でも皆集まってミサにあずかっているんだろうな」と思うと、そのつながりという気持ちがもっとはっきりします。今週もその教区の皆さんとのつながりを感じながら、ミサに参加させていただきます。ありがとうございます。

神学科3年 パドアのアントニオ 佐藤 智宏

「一粒の麦」会員の皆様には、いつも多大なご支援を賜わり、感謝申し上げます。

福岡キャンパスでの神学院生活も、私の感覚で表現すれば「瞬く間に」1年が経過しました。気がつくと、自分はもう祭壇奉仕者の選任を受け、しかも神学科3年というこのキャンパスでの最高学年です。既にこのような段階に至っている自分に不安を感じる場合があります。入学から5年目となった今、これまでのことを思い起こすと、授業では多くの神学の科目を受け、週末一九州では去年は福岡市の箱崎教会、今年は大宰府に近い二日市教会一、および夏休みなどの長期休暇中に様々な小教区において、これまで頂いた役務(去年は朗読奉仕)をもってミサや教会学校、聖書勉強会などで奉仕してきました。でもまだまだ司祭を目指すのに改善が必要な事柄が多い自分自身を、信徒の方々との交わりを通して特に実感しています。

今年度、わたしは福岡キャンパスにて典礼部の部長として、他の全ての神学生との意思疎通を図りながら、典礼関係の役割をそれぞれに分担しています。学生は総勢25名という小さな共同体ですが、今は日本全国から集まっているので、言ってみれば日本の教会の組織の縮図であり、未来の教会を担っていく者たちの集いです。そのことを念頭に置きながら、教会に決して欠かせない典礼活動を皆で支えあって成し遂げていく共同体を作り上げるにはどうすべきかを、強い個性をそれぞれ放っている神学生一人一人の意見や意思を聞きながら、私たちの今の活動が将来の全国の教会にとって価値あるものとなるように共に主なる神に祈り、考えていく1年にしていきたいと思っています。

「2年目を迎えて」

神学科2年 アシジのフランシスコ 坂上 彰

皆様のお祈りをはじめ様々なお支援を頂き、この3月「朗読奉仕者」の選任を受け九州での生活も2年目に入りました。

授業科目も、昨年までは教会の公式文書や聖書原典を理解するためのラテン語・ギリシア語・古典ヘブライ語といった語学や、教会法、秘跡論も『総論』といった所謂神学の基礎知識を学んでいましたが、今年からはいよいよ具体的な『各論』に入りました。そこで今日は私がこの1年間受講している講義をご紹介します。

秘跡論Ⅱ:聖体	キリスト論	教会史Ⅰ:古代
秘跡論Ⅲ:ゆるし、塗油	マリア論	教会史Ⅱ:中世
旧約Ⅱ:詩編	エキュメニズム	教父学Ⅱ:ギリシア教父
旧約Ⅲ:預言書	諸宗教の神学と対話	教会法Ⅱ:神の民
共観福音書Ⅱ:マタイ	宣教司牧と心理学Ⅱ	教会法Ⅳ:制裁と訴訟
共観福音書Ⅲ:ルカ	ヨハネの黙示	教会論
パウロ書簡Ⅱ:パウロの名による手紙	倫理神学Ⅲb:カトリック社会教説各論	神学的人間論Ⅱ:恩恵論
典礼学Ⅲ:救いと恵みの典礼	合同書簡:全キリスト者への手紙	

教えてくださる神父様やシスター方は、九州は勿論、はるばる東京や大阪からも大勢いらして下さっています。昨年は谷司教様も「集中講義」でお越し下さいました。

こうして日々勉強出来るのも皆様のお陰と心から感謝申し上げながら、今日も机に向かっております。

いいんじゃないですか

神学科2年 パウロ 尹兌栄(ユンテヨン)

今年3月、谷司教様から助祭・司祭候補者としての認定を頂きました。感謝しております。そして、今年度神学科2年生になりまして、福岡に初めて来ました。日本に来てから、ずっと過ごしてきた関東から離れて、九州というまた違う文化のところに来ました。今の時代は交通や通信の発達に従って、地域間の差がだいぶ無くなったと言われていています。だから距離がいくら離れていても同じ日本ですから、そんなに違うことはないんだろうと思っていました。「九州の教会は違うよ」と九州に来る前にいろんな方から言われましたが、あまり気にしませんでした。こちらに来て、確かに何か違う雰囲気は感じました。そして、神学校も東京とは違う何かを感じました。しかし、それだけでした。違うことだけでした。自分とは違う何か違和感を感じるのは当たり前でしょう。ある人は自分と違うものに対してアレルギーみたいな反応を示すかもしれません。しかし、違うものに対しての否定や拒否は、少なくとも教会の中では無くていいんじゃないかなと思います。いい加減だと言われるかもしれませんが、いいんじゃない？という一語で平和が来るかもしれません。

今まで多くの方々の支えによって今ここにすることができたと思います。今年も宜しくお願いします。

「福岡での生活」

神学科1年 フランシスコ 高橋史人

こんにちは、さいたま教区の神学生の高橋史人です。昨年、私は日本カトリック神学院・東京キャンパスで哲学科2年生として学びました。東京で、哲学の学びを深めました。東京キャンパスの学生会執行部では副会長を担当し、先輩や神学院の養成者の方々と会議やミーティングなどを通して、対話や交流を深めながら生活しました。昨年一年を過ごして、私はローマの信徒への手紙12章10節にある「兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい」という言葉の大切さをあらためて感じました。様々な意見を通して、いろいろな角度でものを考える機会を与えられました。学生会執行部での経験は、とても良い経験でした。

昨年、神学院(東京カトリック神学院と福岡サンスルピス大神学院)が一つになって、日本カトリック神学院が始まりました。そのため今年4月に、哲学科から神学科になった私は、東京キャンパスから福岡キャンパスに移りました。これから3年間、福岡で学んでいきます。私は福岡に行くのは初めてです。福岡は東京とは少し文化が違うようです。日常のちょっとしたことでも、文化の違いがいろいろ見えて面白いです。たとえば、東京では移動には電車が便利ですが、福岡では移動には電車よりもバスのほうが便利であったりします。

昨年度の私の司牧実習(土曜日と日曜日の実習)は所沢教会でした。所沢教会は青年たちの活動が活発な教会で、とても良い勉強になりました。そして、今年の私の司牧実習は福岡市早良区にある西新(にしじん)教会になりました。信徒の方々の人数は1300人くらいの教会です。西新教会は幼稚園もあって、子どもたちも多く、とてもにぎやかな教会で、教会学校の活動も活発です。

東京で哲学の学びを終えて、これからこの福岡で3年間、神学の学びをすすめていくなかで私は、わたしたち神学生がたくさんの人々の祈りと助けによって支えられていることを感じながら、学びを続けていきたいと思います。私たち神学生のために、これからも祈りとご支援をよろしくお願いします。私たちも福岡で皆さまのことを思いながら、日々祈っています。

九州も良いところです

神学科1年 フランシスコ 山口 一彦

皆様、こんにちは。日頃より私たち神学生を物心両面でご支援いただき、誠にありがとうございます。私、この春に無事、2年間の哲学科課程を修了し、神学科1年生として福岡キャンパスで新生活を始めました。

実は私、九州は生まれて初めてなのです。観光で来たこともありません。基本的な地理感覚もインプットされていませんので、網の目のように張り巡らされたバス路線に、いまだにオロオロしております。そんな中で、もう何度か味わった「お刺身」の味にはびっくりさせられました。うわさに聞いていた以上の新鮮さです。私もこのような新鮮な気持ちでこの1年間を過ごしていきたいものです。

授業はもうバリバリ進んでいます。やはり予想通りヘブライ語に苦戦しております。脳みその中の、これまで全く使ったことのない領域を、ショートさせながらも無理に動かしている感じです。何とか基本的なことだけでも身につけて、『詩編』や『イザヤ書』の文体の美しさを実感したいものだと思っています。その他の神学も、私にとってやはり難しいことだらけですが、哲学に比べてより一層直接的に神様のことを考える分、楽しさや喜びも感じます。

土日には、宣教司牧実習先として「新田原(しんでんばる)教会」に毎週泊まり込みで伺っています。小倉から少し南下したところにある教会です。昔、五島列島から移り住んできた信者様方によって創設されたのだそうです。果樹園に囲まれた美しい聖堂に響き渡るお祈りからは、伝統と純朴さが私の胸に伝わってきます。神学校からは特急を使っても片道3時間かかりますが、九州の靈性を学ぶ素晴らしい機会をいただいたと思います。さいたま教区の信者様方の中にも九州出身の方が多いようですから、今度そちらに帰ったら、共通の話題に花を咲かせることができると今から楽しみです。

この年齢になっても、こんなにも新鮮な毎日を過ごせるのは、ひとえに皆様方のご支援のおかげです。精一杯がんばりますので、今後ともよろしく願い申し上げます。

…共に…

グエン・ゴン・ホアン

私の名前は、グエン・ゴン・ホアンと申します。私は 25 年前、7 歳の時にベトナムから難民として来ました。

現在、さいたま教区の養成方針として、『あかつきの村』で研修を受けています。難民として来て、日本に着いた後、精神障害を患いながらも、あかつきの村を拠り所として生きる先輩方と生活を共にしています。

マザー・テレサは「愛の反対は無関心である」とおっしゃっていました。今ここに居る先輩方も、やはり、一人の人間として友に出会うことを求めています。

その中で、私に何が出来るのかを自分自身に問いただしながら、日々の生活を送っています。今の自分に出来ることは、ただただ一緒(共)に過ごし、共感し、話を聞いてあげる事しか出来ません。

一緒(共)にいることは、簡単のようで実に難しいことでもあります。その人の感情や気分を伺いながら、その人が喜んでもらえるためにあれこれ考えるよりも、心を開いてもらうために自分のはかりを持たずに相手を受け入れる事に大変エネルギーを使います。でも、相手に触れあえた時、そして、笑顔を見せてもらった時には喜びがあります。その喜びは、時には私の勇気になり、生きることの意味をもたらします。

つまり、私たち人間は、物質だけでは十分に満されません。心の糧、愛が必要ということではないでしょうか。

私は、『心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、あなたの神である主を愛しなさい。隣人を自分のように愛しなさい』(マタイ22:37)というみことばを思い起こしながら、行うことの難しさを感じています。

この研修は、私にとっての恵みの時であり、自分自身への召命の確認でもあります。私は、修道会からさいたま教区に移って間もないですが、将来、司祭になった時、私にとってきっと役に立てることだと思っています。まだまだ未熟な私ですが、これからも宜しくお願いします。この機会を与えてくださった皆さまに心から感謝します。

はじめまして

グエン・ゴク・トアン

私(グエンゴクトアン)は、ベトナム出身で司祭を目指して去年からさいたま教区に入りました。

今回私は、「神学生養成のための一粒の麦会員は教区司祭養成と若者の召命のために、個人や家庭、グループで、「祈り」と「献金」によって神学生を支えます」とシスターや神父さん方から聞かされました。

初めて、この「一粒の麦」の会を知りました。本当に有難いことです。一粒の麦会員の皆様がいるからこそ今日の私たちがいることと思います。

今私は、埼玉県の新井町で鈴木神父様が創立した「NPO 法人じりつ」という障害福祉サービスという施設で職員として働いています。

どういう施設かというと「障害福祉サービス」の名の通り、「在宅の心身障害者の社会参加促進のため、身近な地域で通所により必要な自立訓練及び授産活動の場を提供し、社会参加の助長を図ること、身体障害者及び知的障害者で自立した生活を望みながらも、家庭環境や住宅事情等でそれができない方に対し、その社会的自立の助長を図ること」を目的とする施設です。

このように障害者が地域の中で、安心して、自信を持って、自由に生きていくための支援を行うとともに、障害がないにかかわらずお互いを大切にして、共に生き、共に成長して、新しい自分の力を発揮して自己統制力、体力、集中力、自信力、記憶力、表現力、理解力、企画力、想像力、実行力、観察力などを身につける訓練をする所です。

この施設の中にはそれぞれいろんな事業があります。生活支援事業、相談支援事業、地域活動支援事業、就労移行事業、市町村就労支援事業、就労継続支援 B 型など。

私はこの就労継続支援 B 型という所で働いています。主に利用者が地域において共同して自立した日常生活または社会生活を営むことが出来るよう、利用者の身体および精神の状況並びにその置かれている環境に応じて、共同生活住居において相談その他の日常生活上の支援を効果的に行うことです。

私は他の職員と違って精神保健福祉の国家資格はないのですが、神学生としてこの施設の中で精神障害者や知的障害者の方々が長年いろんな病気で苦しんできた年月を少しずつ神の愛の御業を告げ知らせ、その苦しみや苦しみからもたらされる不幸を乗り越えさせる力を分かち合えることが出来れば、福音的宣教活動に近づくことが出来るのかなと思いつつ頑張っています。

このように、日頃健康で元気に活動出来るのも、「一粒の麦」会員の皆さまの精神的、物質的な応援、励まし、支えがあるからこそだと思います。

これからも、キリストの福音宣教活動をますます人々の中で輝かせることが出来るようどうぞご協力をよろしくお願い致します。

～信徒の方々からの声～

神学生と小教区

栃木教会 アントニオ 五十嵐 孝

佐藤神学生から「一粒の麦発行のため原稿をお願いします。」との連絡を頂き、日頃休暇のたびに小教区のボランティアに来ていただいております、これからもこの良い習慣が継続されるよう小教区の宣伝活動も兼ねて感謝の気持ちといたします。

私の所属するカトリック栃木教会は知らない方が多いと思いますが、栃木県の南ブロックに所属し真岡、上三川、小山(佐藤神学生の出身教会)、佐野、足利、栃木教会(中嶋神父様出身教会)の6教会で協働宣教司牧を行っております。栃木教会はJR両毛線と東武線の交差する交通面ではとても便利な巴川(うづまがわ)沿いの閑静な場所に所在します。一時は、蔵の街ブームでテレビ報道があった際沢山の観光客が訪れ、特に大きなイベントもないのに狭い町なみには観光で訪れた方々で賑わっておりました。

栃木教会は1947年(昭和22年)フランシスコ修道会の宣教師によって天主公教会としてこの地に種が蒔かれ、1952年(昭和27年)宣教師の方々の母国から多額の献金もあり現在の聖堂が献堂されたと聞いて居ります。2002年11月の献堂50周年記念ミサ後、体調をくずし入院されたグルベス神父様までの55年間はフランシスコ修道会の清貧と祈りによって支えられてきたと感謝しております。この間司祭、修道女十数名の召命にも与かりました。

2003年からは、教区から司祭が派遣され最初にこられた方がパリミッション会のアントワン神父様(当時真岡、小山教会主任)と土屋助祭(現在高松教区でご活躍の土屋神父様)でした。お二人は十数年建て替えを考えていた司祭館・信徒会館を一年半足らずで建築し、アツという間にアントワン神父様はフランスに、土屋神父様は高松教区へと旅立たれました。そして現在は山口神父様が栃木と真岡教会を担当され教会学校や多国籍の方々のため、また正義と平和の担当司祭として多忙な日々を過ごしております。

本題ですが、ここ数年、毎年春、夏、冬と神学生の貴重なお休みを返上して、将来を見据え小教区のお手伝いや福音宣教の実習のため、何人かの神学生が栃木教会にもお出でになりました。主日のミサの準備、教会行事、教会学校合宿のお手伝い、青年活動のリーダーと活躍していただいたり、日曜日には初めての小教区とのことでとても紳士的で子供達にとってははずいぶん年の離れたお兄さんですが、直に融け込み体力の限りサッカーやバドミントンやバレーボールと一緒に遊んでくれるので久しぶりに教会の庭では子ども達のはしゃぐ声が響いていました。

何週間か後に帰る時にはまた来る事をせがんだり、しばし教会にもさわやかな風が吹き込んで来たようでした。また、小さな小教区とはいえ、子どもから高齢者、海外からの方たち、心身に病を持つ方、職業や家や家族を失った方など本当に多種多様の方たちが集まってくる所だと思います。

神学生の小教区訪問はその大小はあれ、さいたま教区の小教区で働かれる神学生にとって現場を知っていただく良い機会であり、小教区にとっても毎年進級していく神学生の叙階式がとても楽しみでもあります。教会で行っている神学生育成のためのアルミ缶回収にも力が入ります。

時々拝聴する司教様の話の中で、過去十数年浦和、さいたま教区では司祭叙階式が挙行されなく、他教区からは…教区と冗談を言われたとか、現在は毎年叙階式が挙行される教区へと成長したとのこと。その意味でも神学生が各小教区を訪れてくれることは、本来召命の基礎は小教区共同体であり、小教区の各家庭であるということを信徒に考えて頂く良い機会ではないかと思います。

今年も是非来て頂けるよう宿泊の準備をしてお待ちしております。

勉学に励む神学生の方々の上に神の豊かな恵みがありますように。アーメン。



献堂 50 周年 撮影 信徒阿部さん

養成担当者より

養成担当者の恵み

養成担当 援助修道会 尾碕一美

私が、さいたま教区の養成担当を引き受けてから三年が経ち、その間、司祭を目指す方たちや神学生たちと出会い、関わりのときを持ってきました。

さいたま教区は、多くの国籍(日本人も含めて)を持つ人々が集まる教会共同体ですから、神学生たちも、社会、習慣、文化背景の異なるいくつかの国から集まっています。共通語は、日本語ですが、特に非漢字語圏の人が、日本語を学び、コミュニケーションできるようになり、哲学・神学を日本語で学習するには、大きな壁が立ちはだかっています。

そんな中で一人ずつが、さいたま教区の中で司祭になっていくまでの歩みを振り返ってみると、その中に『神様の愛』『神様の業』の神秘に触れる一場面を見させていただくすばらしい時がしばしばあります。

年に二回、神学生たちは合宿を行います。内容は、神学生たちが話し合っただけなのですが、この2～3年のプログラムを思い出してみると、さいたま教区の中で一番小さな草津教会の大掃除を手伝い、栗生楽泉園を訪問したり、日頃から祈りによって支えてくださっているシスター達のトラピスト修道院の典礼にあずかり、共に賛美を捧げたり、谷司教から「協働宣教」や「さいたま教区・宣教の歴史」の話の聞くなどなどです。

合宿で過ごす中、那須教会・大田原教会の先輩司祭ローランド師やバルト師が顔を出してくださったり、聖公会・松浦司祭の話を伺ったり、黙想の家のシスター方の心のこもった食事やもてなしに接したりしましたが、短い時間であっても、さいたま教区でこれから協働する方々との大切な出会いの時間となったことでしょう。教会の実習先での信徒の方々との関わりも、同じです。

神学生の皆さんに申し上げたいことをひとつだけ書かせてください。

今、社会の中の教会共同体の中で、『ともに祈り、対話し、助け合っただけで活動する、すなわちチームで働ける司祭が今日ほど求められている時代はないといえる。・・・生き生きとした宣教共同体となっていくようリーダーシップを発揮する・・・』(日本カトリック神学院の養成理念と指針より)とあるように、現代の司祭にはチームで働くセンスが求められています。

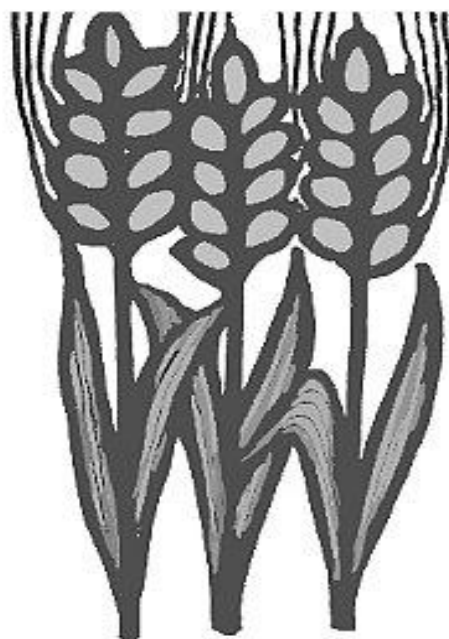
共同体の中で出会っていく人々と出来事が、そして、様々な体験が司祭としてのアイデンティティをつくりあげ、教区司祭としての靈性を深めていってくれます。

またその中で、自分の恐れや傷にも向き合って、自己の気づきのうちに、信頼関係の中で自分を神に自由に捧げることを学んでいくことができるのだと思います。

どうぞ、与えられた仲間達を大切に、互いのために祈りあってください。

教区のみなさま、神学生たちが、これからも『名指しで呼んでくださったイエス』の招きに『誠実さ』と『自由』をもって応えることができるように祈り続けてください。そして、司祭に叙階されたらナカナカ言えないことを、神学生時代のうちに、勇気をもって優しく、しかし、はっきりと伝えてあげてください。

これからも、神学生たちを、よろしくお願ひ致します。





感謝と報告

事務局長 矢吹貞人助祭

さいたま教区司祭の養成のために、「一粒の麦」会員となって、いつも祈りと献金による温かいご支援をいただき感謝いたします。お陰さまで、この春もまた、3月22日、ネルソン・カバシシ・セノ助祭が浦和教会において司祭叙階の恵みを受け、司祭の道を歩み始めました。早速、群馬西ブロックへ派遣され、高崎教会に住みながら、猪俣神父とお二人での協働宣教司牧に励んでおられます。

さいたま教区神学生は現在8名、そのうち6名が福岡キャンパスで学びの日々を送り、残りの2名は神学校外で研修中です。順調に行きますと来春には2名の神学生(姜玖周・佐藤智宏)が助祭叙階の恵みに与ることでしょう。

2009年度の「一粒の麦」の会計報告は次の通りです。

会員数:309名(19名の増)

献金総額:6,662,706円(683,954円の増)

本当にありがとうございました。これまで通り、神学生養成費、神学校分担金などに使わせていただきました。

現神学生に加え、さいたま教区司祭への道を希望する若者が続こうとして、数人が準備の途上にあります。このように召し出しが続いていることを皆様と共に神に感謝したいと思います。したがって、教区としては、当然に生じる養成のための費用の増加にも引き続き努力を続けなければなりません。嬉しいことに、「一粒の麦」は昨年度、会員数も献金総額もそろって増という結果となりました。大きな感謝です。今年はさらに新しい会員の方が増えますよう、どうかお力をお貸してください。所属教会の親しい信徒の方などでまだ入会されていない方がありましたら、ぜひお勧めください。

なお、ニュースレターなどが確実に届きますよう、転居・電話番号の変更等がありましたら、ご面倒でも、さいたま教区事務所まで必ずお知らせください。

暑さ厳しい日が続いております。皆様のご健勝を心からお祈りいたします。

皆様の上に神様の豊かな祝福がありますように。

一粒の麦感謝ミサ

日時 2010年9月20日(月) 14:30~

場所 カトリック浦和教会

司式 谷 大二 司教



発行日 2010年7月22日

発行 カトリックさいたま教区

編集責任者 矢吹貞人

編集 さいたま教区神学生一同

住所 〒330-0061 さいたま市浦和区常盤 6-4-12

さいたま教区事務所内

TEL 048-831-3150 FAX 048-824-3532

代表 さいたま教区 司教総代理 猪俣 一省神父

振込先 郵便振替口座番号 00180-0-358503

加入者名 「一粒の麦」